

第4回：日本銀行券と和紙～山口県の三極（みつまた）

皆さんは、かつて山口県が、全国有数の「和紙」の生産地だったことをご存知でしょうか。実は、2014年にユネスコ無形文化遺産にも登録された和紙¹は、皆さんが毎日使っている「お札」つまり「日本銀行券」とも深い繋がりがあるのです。今回は、この2つの「紙」に使用され、山口県内でも栽培されている「三極（みつまた）」を取り上げます。

中国から日本に製紙技術がもたらされたのは推古天皇の時代（610年頃）とされ、その後、徐々に日本全国に広がっていきました。山口県には、文治2年（1186年）、東大寺再建のため奈良から下向してきた重源上人によって現在の山口市徳地地域に和紙がもたらされたとされていますが、実際にはもう少し古くから製造されていたとも言われています。

当初、和紙の用途は経典や行政文書などに限られていましたが、徐々に障子や襖など住居の中でも使われるようになりました。そのため、自生している雁皮（がんび）などでは足りず、次第に人工栽培が可能な楮（こうぞ）や三極の生産が増えていきました。江戸時代に入ると、商業が発達し、帳簿、笠、提灯、扇子・団扇、表具、造花など和紙の需要は急拡大します。

山口県でも、毛利藩の「三白（米、塩、和紙）政策」の一つとして手漉き和紙の生産が奨励され、米の代わりに半紙²を公租として代納する仕組みができました。その結果、山代地方（現在の岩国市美和町、錦町、本郷町など）や徳地地方を始めとして県内各地で和紙生産が盛んになりました。その後、明治時代になってからも、山口県の奨励により、低価格かつ良質な和紙が大量に生産されました。



三極の花

¹ 2014年、ユネスコは、2009年に無形文化遺産に登録されていた石州半紙（島根県浜田市）に、本美濃紙（岐阜県美濃市）と細川紙（埼玉県小川町・東秩父村）の2つを追加し、「和紙：日本の手漉和紙技術」として拡張登録しました。

² 江戸時代末期に書かれた「広益国産考」には、山代半紙、徳地半紙、鹿野半紙、熊毛半紙、阿武半紙、小川半紙、須万半紙、岩国半紙などの名が挙がっています。

三桠は、温暖で、湿気が少ない地域で育ちます³。また、紙を漉くためには良質な水が欠かせません。中国・四国地方の山間部がこうした条件に恵まれていたことから、山口県は、徳島県、岡山県、島根県、高知県、愛媛県などと共に、次第に三桠の主要生産地に成長していったのです。

しかし、洋紙の普及に伴う和紙需要の減少などもあり、昭和時代に入ると生産農家が急減し、国内の三桠栽培面積は、1965 年度 5,450ha、1995 年度 681ha、2012 年度 48ha と大きく減少しました。また、銀行券の原料として国立印刷局に納められる「局納みつまた⁴」の出荷量も、1965 年度の 778 トンから 2014 年度には 7.5 トンにまで減少しています⁵。山口県内の山口市徳地地域の和紙手漉き農家は 2 軒のみとなりました。



三桠の皮（白皮）

こうした状況下、近年、手漉き和紙技術の伝承に向けた活動が活発になっています。山口市では、平成 26 年度に国の過疎地域等自立活性化推進交付金を活用し、施設整備や苗木の植え付け、商品開発支援などを行いました。徳地地域では、手漉き和紙技術者や原材料生産者、地域住民が主体となり「山口とくち和紙振興会 結の香」を設立し、後継者育成や原材料生産の拡大、徳地和紙の P R、山口県立大学等との連携による新商品開発などを行っています。岩国市でも、「岩国往来まちづくり協議会」が岩国往来沿いに三桠の植林を行っているほか、地元の中学生に植樹、皮剥ぎ、手漉き等の和紙作り作業を体験してもらい、和紙の卒業証書を制作する取り組みを続けています。

毎年、3 月中旬から 4 月にかけて、黄色くキンモクセイに類似した香りの良い三桠の花が咲き揃います。銀行券と三桠の歴史に思いを巡らせながら、古道巡りや紙漉き体験を楽しんではいかがでしょうか。

（執筆：窪田雄司、渡辺夏実 平成 28 年 5 月）

³ 三桠は成育が遅いため、皮を取るために伐採するまで 3 年程度かかります。

⁴ 現在は、徳島県三好市と岡山県岡山市の 2 か所に「みつまた調達所」が設置されています。

⁵ 日本特産農産物協会「特定農産物に関する生産状況調査」、「和紙原料に関する資料」、国立印刷局「2015 環境報告書」調べ。なお、2014 年度の局納みつまた出荷量は、国立印刷局お札と切手の博物館より聴取。

関連地域① 山口市徳地地区「重源の郷」



「重源の郷」（山口市徳地深谷 1137）には、和紙作りのほか、そば打ち、藍染、木工などの体験工房があります。また、園内には、四季の草花や木々の中の山野草を楽しみながら散策できる散歩道も整備されています。

園内にある「徳地文化伝承館」では、東大寺再建に尽力した重源上人の足跡を知ることができます。重源上人（1121～1206 年）は、1181 年、焼失した東大寺を再建するため、後白河法皇に大猷進職（だいかんじんしき）に任じられ、周防国徳地に下向しました。そして、佐波川の水位を増すために関水（せきみず）を設置するなど、宋で学んだ土木技術を活かして伐採した大木を奈良まで運び、1195 年に大仏殿を、その後、南大門や 2 体の金剛力士像を完成させました。

現在、佐波川沿いには、重源上人のもとで材木を運搬した人夫達の疲れや怪我を癒した岩風呂が残っています。また、下流の防府市には 1187 年に東大寺別院阿弥陀寺が建立され、今も、あじさいの咲く頃になると大勢の人が訪れています。

関連地域② 岩国市美和地区「岩国往来」



「岩国往来」は、岩国市山間部の本郷町から錦帯橋を経て、今津まで続く約 30 km の古道で、1600 年に出雲国から岩国に移住してきた吉川広家の家族とその家臣が通ったことでも知られています。

春は、梅、三桠、桜と、色々な美しい花を楽しむことができ、夏には蛍が多く飛び交います。（岩国市美和町）

- <参考資料>
- (1) 『宮本常一集』、未来社、1987 年
 - (2) 『山口県の歴史』、山川出版社、1998 年
 - (3) 『天命の人 ― 俊乗房重源の生涯』、古賀武陽、2015 年
 - (4) 日本特用林産振興会ホームページ

（解説）銀行券の素材

日本銀行券をよく見ると、「国立印刷局製造」という文字が入っています。銀行券には、独特の色彩や手触り、鮮明な肖像のすかしなど様々な特徴を兼ね備えた特殊な紙が必要なため、日本銀行は明治 15 年（1882 年）の創立以来、銀行券の製造を明治 4 年（1871 年）に設立されていた印刷局に依頼しています⁶。

江戸時代の藩札は、和紙の 3 大繊維素材である楮、雁皮、三桠を単独あるいは混合して各藩や和紙の産地で製造されていました。慶応 4 年（1868 年）に明治政府が最初に発行した太政官札も、楮や雁皮を配合して製造されましたが、印刷技術が簡易で偽造が横行しました。1870 年には技術先進国ドイツに製造委託し発行した紙幣は、印刷は緻密でしたが用紙に耐久性がなく、回収交換が相次ぎました。さらに国立銀行制度が始まると、アメリカの銀行券製造会社製の紙幣も輸入されましたが、コストが嵩みました。



太政官札

そこで、明治政府は再び銀行券の国産化を目指します。楮は繊維が粗く、銀行券には不向きでした。雁皮は楮に比べて繊維が細かく滑らかなため、複雑な模様の印刷に適していましたが、人工栽培が難しく、継続的かつ大量に供給することが困難でした。一方、三桠は、①人工栽培が容易で、②繊維が柔らかく、緻密な模様や図柄を鮮明に印刷でき、③耐久性に優れ、偽造防止策の「すかし」を取り込むことにも向いてい

ました。そこで、1881 年発行の改造紙幣一円券から三桠 100%に切り替りました。

第二次世界大戦後、銀行券製造に必要な三桠の確保が難しくなると、印刷局ではマニラ麻（アバカ）を用いた製造技術を開発し、1953 年から五十円紙幣は全量を、百円紙幣は一部を三桠からマニラ麻に変更しました。そして、現在でも、マニラ麻は三桠と並んで銀行券の中心的な原料になっています。

- <参考資料> (1)「お金の源 素材の歴史と作り方 最終回 日本近代紙幣の紙」、稲葉政満 東京藝術大学大学院教授、『にちぎん (No.44、2015 年冬号)』、2015 年
(2)「お札よもやま話【第 1 回】紙のみぞ知るお札の妙」、独立行政法人国立印刷局お札と切手の博物館、『ファイナンス』、2012 年

⁶ 現在の国立印刷局は、明治 4 年（1871 年）に大蔵省紙幣司として設立された後、紙幣寮、紙幣局と改称され、1878 年から印刷局となっています。